

「Tumor Dormancy Therapy

癌治療の新たな戦略」

金沢大学がん研究所助教授 高橋 豊 著

国立がんセンター名誉総長・東邦大学名誉学長

杉 村 隆

この高橋博士の本を見たときに、瞬間的に読みたいと思った。表紙にうっすらと“Must we kill cancer?”という字が出ている。本当にわれわれが体内のがん細胞のすべてを殺すことができることに、私は長い間懐疑的であった。“Must we kill cancer?”は私の心の中ではいつも“Can we kill all cancer cells?”に連想が飛び、更に、“We can not kill all cancer cells!”になり、“We should not kill cancer patients!”になるのが私の連鎖反応であったから。最近の学問の進歩を学ぶにつれて、私の心は“We can control cancer cells; we can control cancer patients”と、だんだん変わってきた。

この本はタイムリーな本であった。多くの、真摯にがんを考えている臨床従事者、がんの基礎研究者、がん征圧に様々な立場より関与している方々にとって有用な本である。もちろん、製薬企業や薬事行政に関わる方々にも有用と思う。

がん細胞も、がんを持つ患者さんも実に様々であり、一筋縄ではいかない。わかったつもりになっても本当にはわからない。乳がんの手術後

10年以上も経って再発したと思われる例がある。前立腺がんが、いわゆる潜在がんとして存在することは多いし、その潜在がんが突然転移することもあり、そのまま10年も潜在していることもある。交通事故で亡くなったニューヨーク市民の甲状腺には潜在がんが多い。

がんは遺伝子変化により起こる。変化する遺伝子はシグナル伝達に関係するものが多く、具体的には直接間接に細胞分裂、分化、増殖、自殺死、転移などに関連しているものである。更にDNAの塩基配列異常を伴わないけれど、その遺伝子発現の異常が起こるエピジェネティックな変化もある。変化の組み合わせは気が遠くなるほど複雑であり、ある組み合わせがいろんな角度からDormancyに関係しているのだろう。

本書は大別して、①がんの生物学、②現在の化学療法、そして③Dormancy Therapyに分けられている。記載は具体的である。A5判の172頁で持ち運びに便利で、電車の中でも読みやすい。日・英語の索引があるのもありがたい。各章ごとに文献がついていて便利である。

がんに関係している人は自分の考えに凝り固まりやすい。がん化の予防に有効なCOX-2阻害剤が、がん治療剤にもなりそうな今日であるから、Dormancyということを皆で深刻に考えるとよい。

がんの分化療法とか、このDormancy Therapyは、21世紀に進む科学の1つである。故司馬遼太郎先生に前がん病変のお話をしたら“未発のがん”だと言われた。Dormancy Therapyは、実際には10年くらい前に、この本の著者が提唱したものの“長期不変(long NC; long no change)がん”とも言うべきである。われわれの頭の中にdormantになってしまっている考えかたを見直すために、この「Tumor Dormancy Therapy」という本は様々な材料を提供している。遺伝子治療を含めて、新しいがん治療には、この側面をいっても考えたほうがよい。

重ねて、多くの方々に、この好著をお勧めしたい。

● A5 頁172 図82 カラー写真3表33 2000 定価(本体3,800円＋税) 送料実費

—医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)